書評

クワイン『ことばともの』

Willard van Orman Quine, *Word and Object*, MIT & Wiley. 1960. pp. 29. $ 5.75.

土屋純一

論理学者としてのクワインの決定的な業績は、一九四〇年に出版された *Mathematical Logic* であろう。この体系はホワイトヘッドとラッセルの『数学原理』の継承であるとともに、いくつかの点で重要な修正を加えている。いま意味論上の特色の一つを挙げるなら、ラッセルが曖昧にして使っていた〝命題函数〟を整理して、外延性（extensionality）の原則を徹底したことが注意を引く。この点が、外延的解釈の実用上の有利をみとめながらも、内包的解釈との並行路線を保存しようとするカルナップ、或いはチャーチらの意味論上の政策と、クワインの立場との区別徴表にもなっている。

抽象存在（abstract entity）のさまざまなレヴェルをできるだけ整理しようとするクワインの方針は、しばしば唯名論という呼称を受けてきた。しかしわれわれは、唯名論とか実在論という貼札をつけあう前に、何ものかを存在論に繰りこむことはどんな基準によって語られるのかについての約束をしておかなければならない。この要求に応ずるのが ontic commitment の基準・「存在するとは、（束縛 bound）変項の値となることである」である。これに照らしてみると、かれの体系では、真理函数論と quantification theory（それぞれいわゆる命題算と述語算に当る）、つまり elementary logic は、抽象存在を措定しない解釈で運用されることが示される。問題はその先であって、（クワイン自身の試論にも拘らず）集合論の唯名論的解釈はむずかしいようである。かつてラッセルは no-class theory を立てることができたと信じたけれども、それは実は集合の代りに属性を暗々裡に措定していたのであった。しかし属性を代表とする内包的抽象存在はきわめて扱いにくいものである。なぜなら、内包的対象の同一性を規定するに当っては、同義性（synonymy）や分析性（analyticity）という概念に頼らなくてはならない。いま、言語の機能のうちから指示（reference）と意味（meaning）との二つの象面を取り出してみると、理論的な扱いに耐えるのは前者だけではあるまいかというのがクワインの予想である。一部の哲学者が意味というものの正体の怪しさを黙過して、同義性や分析性をたいへん確かなもののように見ているのは、かれらの言語観、または経験と理論との連関の捉え方に古めかしい所があるためではないか。――この点を指摘した[1]のが一九五一年の論文 *Two Dogmas of Empiricism* である。そこで言及された二つのドグマとは、分析性の概念の正当性の主張、言いかえれば、言明を分析的―綜合的と、非連続的に区分する考えであり、今一つは、科学理論の真理性を、個々の言明の真理性に還元し尽せるとみる伝統 ―― reductionism

であった。

それでは、クワイン自身の新しい言語哲学はどのようなものであろうか。その展望を与えるのが、一九六〇年に出版された本書 *Word and Object* である。論理学ないし集合論の形式的な扱いを除くと、かれが従来論じてきた問題がほぼもれなく再登場しているという点で便利であるのみならず、（同義性の問題の発展としての）翻訳の問題・言語の学習の問題・非指示的文脈の問題などの扱いに新たな展開が見られる。

分析的言明とされるものに二種類ある。ひとつは 'No unmarried man is married.' のように、その真理性が文法上の約束にもとづくもの（tautology）であり、今ひとつは 'No bachelor is married.' のようなものである。後者はその中の名辞の意味だけを手掛りにして（事実についての情報なしで）真偽が判定されるから分析的だとするのが従来の見解であった。なるほど 'bachelor' と 'unmarried man' が同じ意味をもつなら、置きかえによって文法上の真理性へ連れ帰せようが、果してこの同義性に十分な根拠が与えられるだろうか？　「すべての bachelor は unmarried であり、逆も成立つ」という言明が分析的であること、という定義では循環に陥る。カルナップは「意味論規則によって真」なら、言明は分析的だとする修正案を出したが[2]、クワインはそのような規則（後に「意味公準」とも）も、分析性の理解を前提していると批評する。同義性や分析性は比較的のものであり、分析的言明の領域を確定できるほどのものではない。

以上の見解はすでに *Two Dogmas* で明らかにされていたものであるが、本書ではこうした事態が、言語学者と、かれにとって未知の文化と言語をもつ原住民とのあいだで進行される翻訳の作業（radical translation）を想定して具体的に再検討された（第二章・翻訳と意味）。その論点は、「われわれの言語のうちどれだけの部分が刺戟条件（stimulus condition）によって有意味になるか」言いかえれば、個人個人の conceptual scheme のなかで、経験的には条件づけられないようなズレはどこまでか、という問である。いま二人のひとの間で、すべての可能な感覚的刺戟に対して反応する言語行動の傾向（disposition）が同じであったとしても、かれらが同一の表現についてもつ意味または表象は根本的に異る、ということは大いにありうることである。二人の話し手の言語（無数の文のなす全体）は、言語行動の傾向としては対応するけれども、その中の等しい文どうしを対応させることはできない。その際、文と非言語的刺戟との繋がりが弱ければ弱いほど、相手の言語内の文に対応を見つけることは困難になる。二つの社会的な言語の間にも同様のズレがある。

言語学習の時間的な順位では、文が単語に先立つ。われわれは「痛い」、「赤い」、「四角」といったことばを、先ず一語文（one-word sentence）として学ぶ。radical translation においても言語学者は最初一語文の形の土語を学ぶだろう。そして非言語的刺戟に対する土人の同意または否定（assent or dissent）

に照らして一語文の翻訳を手にするとしたら、そこでは stimulussynonymy と言うべきものが成立しよう。それは刺戟意味(stimulus-meaning)――話し手の文に対する同意を促すような刺戟からなる集合――の同一である。

一般に文には、刺戟が与えられたなら或る限界時間以内に訊ねられたときにだけ同意または否定を要求する文(occasion sentence)と、そうでない文(standing sentence)とがある。後者に対する反応を確かめるには刺戟を反覆する必要がない。occasion sentence に対して行動主義の手法で stimulus-synonymy を確認することは可能のように見えるけれども、すでにそこでも困難が生ずる。それは話し手の反応の決定に当って、かれが直接の刺戟以外に得ている副次的な情報の影響によって刺戟意味を変えることがあるかも知れないからである。そこでそうした影響から独立な一群の文を観察文(observation sentence)として取り出してみる。しかしその観察性は漸移的であって、異る話し手の間で刺戟意味が一致すればするほど観察性は高いと言える。他方、文と文との言語内での繋がりと、話し手の過去の経験の個人差とが観察性を弱める要因になる。

刺戟意味にもとづく限りの文の同義性と分析性の定義は可能だけれども、哲学者の要求する同義性はそれとは隔っている。例えばカルナップのいう内包同型(intensional isomorphism)は、文の内部構造の、部分と部分との対応をも要求するものになっている。しかし行動主義の接近法はそこで限界に行き当る。それは、名辞(term)についての同義性の確定が文の場合よりも更に困難だからである。これはクワインの例ではないけれども、われわれが外国人に桜の花を指しながら「サクラノハナ!」と発言するとき、かれはこの文の刺戟意味を学ぶとしても、名辞としての「サクラノハナ」については、それが個々の花を指すのか、花の咲いた枝全体を指すのか、蕾や実と区別される段階としての花を指すのかが分らないだろう。すなわち、文どうしで stimulus-synonymy が成立しても、その中の名辞の指示の同一性は保証されないのである。

語族的にも文化的にも異質な二つの言語の間で翻訳が可能なのは、(1)観察文(2)真理函数(例えば二つの文のそれぞれに同意を示すとき、かつそのときに限り二つの文の結合に同意を示すなら、その結合詞を 'and' と訳してよい)、(3) stimulus-analytic な文、にかぎられ、(4) occasion sentence のうちでも観察的でないものは、(その社会のほとんどすべてのひとの同意として)間主観的な stimulus-synonymy は定まるけれども、翻訳は不可能である。この先は言語学者は、耳にする発言を区切ってその言語の〝単語〟に関する一種の字引を作って作業を進めるだろう。これが翻訳の分析仮設(analytic hypotheses)である。仮設の当否のテストの助けになるものは、さきの四種の同義性にとどまり、諸仮設は相互の両立は不可能でも言語行動の傾向全体とは両立しうるから、どの分析仮設が正しいかを決めることはできなくなる。これが〝翻訳の不確定性原理〟である。

名辞の翻訳が確定できないのは、名辞の指示の位相を決めるための仕掛け、英語で言えば定冠詞・不定冠詞・複数形・繋辞

といったものの翻訳の不可能性でもある。そこでクワインの次の関心は、referential apparatus としての英語を、学習に関聯させて考察することに移る（第三章・指示の Ontogenesis）。

幼児がどのようにして名辞の指示の領域を拡大してゆくかは次の五つの位相に従って述べられる。(1)最初の段階では学習は ostensive である。「ママ」、「水」、「赤」といったことばは空間時間内に散在する拡がりの名前であって、特殊と一般との区別はまだ成立していない。(2)次に一般名辞・指示的単称名辞、或いはその変形としての記述が入る。単称名辞と一般名辞のちがいは、指示対象が一か多かということではなく、区別徴表は文法上の役割にある。もっとも両者の区別は日常の表現では截然としてはいない。その中間的性格をもつものは、いわゆる物質名詞である。

(3)指示の第三の位相は複合的な一般名辞、すなわち「青いリンゴ」のような名辞である。それは、例えば「円い四角」のように、何ものについても真でないことがあるを教えるけれども、新しい対象への指示を設定しない。(4)しかし、単称または一般名辞に対して関係名辞（relative term）を適用して得られる表現は指示の領域を拡大する。なぜなら、例えば「この鉛筆より短い」という名辞の指示する対象を指摘することはもはやできない。[3] (5)第五の位相は単称抽象名辞（'roundness', 'redness'）である。

しかし日常言語は不確定性と不規則性を孕んでいる（第四章・指示の気紛れ）。その代表的なものとしては(a)名辞の指示領域の境界についての漠然性（vagueness）、(b)名辞の指示またはシンタクスに関する多義性（ambiguity）、(c)指示の不透明性（referential opacity）である。漠然性と多義性は混同されてはならない。「青」と「緑」の境界や、どれほどの隆起を「山」と呼ぶかの規準はぼんやりしているけれども、このことはかえって言語の使用を潤滑にしているとも見られる。他方、多義性は懸詞や謎々の作者に役立つだけである。しかし近代論理学はとくにシンタクスの多義性の解消に威力を発揮した。それは日常言語のさまざまな表現を、一定の構造をもった表現に記載し直す作業である（第五章・編制）。このことは、かつて論理的原子論者が企図したように、〝世界の論理構造〟を示そうとするものではなく、われわれの目的に応じて編制を行うことである。「有用と見える以上に論理構造を露わにするな」という格率が理論の錯綜を防ぐ。そのためにクワインが背景としているものは、かれの elementary logic であり、しかもそれは見掛け以上に強力な装備なのである。

基本的表現は変項（x, y,…）と、文形式（'Fx', 'Gxy',… 'F', 'G, は一般名辞に相当する）と、量記号 quantifier（'(x)' または '(Gx)'）とである。一般名辞が名前でないことの含みは大切である。表現「Xは犬だ」を、'$x \in$ dogkind' もしくは 'x has dogness' と編制すべきであろうか？　これらでは 'dogkind', 'dogness' が free であるから、われわれが集合や属性の存在に言質を与えたことにはならないが、むしろそれゆえに不必要な手続きである。'x is-a-dog' と読み（つまり 'is-a'

は言わば名詞を動詞へ読みかえるための接頭辞とみられる)、'Fx' と編制すれば、抽象存在の措定に neutral であろう。この方針に抵抗するように見える事態がいくつか伏在するが、その一つを挙げると、文法上は単称名辞でありながら指示対象をもたない表現の招く困惑である。ラッセルの単称記述の理論は始めてその解決を提示したが、クワインもその技法を受け継ぐ。その結果、単称名辞はすべて消去 (eliminate) できることが明らかにされた。「名詞とは、代名詞の代りをする品詞」というパースのことばが実証されたわけである。

算術の形式化に当ってその一部分に関する限り集合の存在を措定せずに済むというのは本当である。しかし集合を quantify しないでは行き止りである(典型的な例はフレーゲによる自然数の定義で必要)。それは elementary logic から集合論へと上昇することであるが、その際、open sentence 'Fx' から、集合へと属性へとの二通りの抽象があることを思い出さねばならない。ラッセルは『数学原理』で、'Fx' (かれの用語は「命題函数」をじつは時として 'x has F-ness' と読み、この読みに従って集合を定義したけれども、属性と集合とは交換可能ではない筈である。なぜなら、集合については外延性の原理

$$(x)(x\varepsilon\alpha.\equiv.x\varepsilon\beta)\supset.\alpha=\beta$$

が成立するのに、'Fx' を属性と読むとき

$$(x)(Fx\equiv(Gx)\supset.F=G$$

は成立しないからである。だからクワインの政策は、集合の membership を示す述語 'ε' を始めから導入して集合を定義することになる。すなわち Fx の定める集合は、記述詞を使うと $(\iota\alpha)(x)(x\varepsilon\alpha\equiv Fx)$ と書ける。[4]

集合論の局面では、属性は今のべた理由から不要であるが、一部の哲学者は、カルナップの著書の表題どおり〝意味と必然性〟の領域での内包的対象の有効性を信じているように見える。それらを「無しで済ます」という方針が次に試行される(第六章・内包からの脱出)。

内包の存在をわれわれが印象づけられるのは、指示の第三の気紛れ、すなわち指示が不透明 (opaque) な文脈においてである。典型的な文脈は引用符号の内部であるが、特に重要なものは、様相を述べるとされる一群のことば(「可能」「必然」など)を含むものと、「信じる」「疑う」「さがす」といった志向的(意図的 intentional) 動詞を含む構文である。つまり様相論理学の解釈[5]と、belief-sentence 論とが代表的な論点になる。いま後者の例だけ挙げると、「太郎は花子が犯人だと信じている」という文が真だとするとき、もし太郎が花子の家族関係に暗いならば、「花子」の代りに同一の対象を指示する記述「次郎の妻」を置き換えた結果は偽かもしれない。つまり不透明な文脈では代入によって、真理値のズレが生じうる。もう一つの困難は無制限に quantify すると混乱を生ずることである。上の例から

$$(Qx)(\text{太郎は}x\text{が犯人だと信ずる})$$

としてよいだろうか? この量化を許したとき、措定された対象は何か? それが個体としての花子であれば、それはまた、次郎の妻なのだから、「太郎は、次郎の妻が犯人だと信じてい

る」が得られてしまう。このことからわれわれは、belief の対象は外延ではなく内包ではないかという考想に導かれる。もしここで内包を抽象する操作を許すと、closed sentence からか open sentence からかの区別に応じてそれぞれ（〔…〕は内包の名前）

太郎は〔花子が犯人であること〕を信ずる

または

太郎は花子について〔犯人であること〕を信ずる

とでも書けよう。前者では対象は命題（ゼロ項の内包）、後者では属性（1項の内包）とみられる。こうすれば「〔…〕」の内部以外では指示が正常の働きをし、belief の表現、一般に propositional attitude は、内包的対象を項に加えることで n 項関係として解釈できるように見える。しかし内包的対象そのものが困難をふくんでいる。属性の同一条件は集合に比して狭いものであり、その定義も明らかでないことはすでに触れた。カルナップは belief の対象は「L-真」の概念（結局分析性へ行く）だけでは同一条件が足りないとみて、〃内包同型〃を導入したが、クワインの立場ではこれらはわれわれの言語行動に即して扱うことはできないものと判定された。

〃命題〃について、いくらか別の視点から考察すると、それは伝統的に真理性の解釈と結びついてきた。文は、刺戟との結合を弱めるとき、その真理性発言の主体、時間・場所などから独立になってゆく。理論のうちに現われる文の多くは standing sentence の極限としての eternal sentence である。文の真理性はそれの抽象である〃命題〃によってになわれるという思想が育った。クワインの解釈ではこの〃命題〃は eternal sentence の〃意味〃だとされる。すると命題の同一性は eternal sentence の同義性に求められるだろう。しかしその確定は不可能であった。逆に、命題の同一性を楯にして異なる言語間の文の同義性を定義できると主張するなら、特定の、翻訳の分析仮設の〃正しさ〃を独断することになる。

内包的対象が受け入れ難いものだとすれば、propositional attitude の処理の最後案は、それらを独立の項としないで、動詞と複合させて述語のうちへ組み込むことである。そうすれば内包的対象が変項の値になるおそれはなくなるだろう。

感覚所与でなく物的対象を、属性でなく集合を、というのがクワインの存在論であり、かつそれで十分であることが、最後にその他の抽象存在の消去、とくに関係や数の還元を通じて集合の強力さを示すことで説かれる（第七章・存在決定）。

クワインの志向する哲学的分析は、〃隠されていた意味を露わにする〃ことではなくて、canonical notation を武器にして日常の言語を編制し、その混乱を解消することであって、その標語化が 'Explication is elimination.' である。このことは、哲学の問題は言語の問題であり、存在論の問題と見えるものは、どの "linguistic framework" を選択すべきかという言語政策の対立にすぎないのだとした、カルナップの見解と一致するだろうか？[8]　クワインの指摘ではそうした立場こそ、科学の言明は経験へと還元される一方、哲学の言明は分析性の上に立つと

見ることである。じつはすべての理論的言明は、非言語的刺戟への直接の条件づけを欠くという意味で、プラグマティックに主張されるのであり、その点では科学と哲学とは連続的である。また、存在を措定する前に、それを指示すると見える表現について語ろうとする semantic ascent の方法は哲学の専有物ではなく、科学理論もラディカルな変革を遂げるときこの方法で成果を収めてきた。科学と存在論の相異は扱われるカテゴリィの広さの差である。後者は物理学者や数学者がはじめから措定してかかる物的対象、集合、……などの realm の存在じたいを吟味する。存在論は observation から超越しているのではなく、ただ両者の間には夥しい量の理論が錯綜して介在しているために、哲学者は言語分析を方法に採用しなければならないのであり、同時に、存在論はことばの争いにすぎないかのような印象を与えてきた。哲学者もかれ自身の思考形式という船に乗って経験の海に乗り出している。欠陥が気づかれたなら、われわれは simplicity と整合性の要請に照らして、船に乗ったまま修繕するほかはないのであり、ドックで解体修理することは不可能なのだという、ノイラートのことばをクワインは好んで引き合いに出している。プラグマティズムはつまりは改良主義なのである。

(1) *Philosophical Review*, 60 (1951), 20–43. 論文集 *From a Logical Point of View* (1953, rev. ed. 1961) に収録。

(2) 分析性の問題に関するカルナップの修正意見は "Meaning postulates" (1952) および "Meaning and synonymy in natural language" (1955) で、両方とも *Meaning and Necessity* (2nd. ed. 1956) に付録として入っている。

(3) 関係算で編制すると例えば 'xRa' が open である ('x' が free) こととなる。

(4) 集合論についての重要な論文——Quine, "On Frege's way out," *Mind* 64 (1955), 145–159.

(5) Quine, "Three grades of modal involvement," *Proc. of XI th Intern Congress of Phil.* (1953) 14, 65–81 に詳しい考察がある。

(6) Cf. Carnap, "Empiricism, semantics, and ontology," *Revue Intern. de Phil.* 4 (1950), reprinted in *Meaning and Necessity* (2nd. ed.). Linsky 編の *Semantics and the Phil. of Language* にも入っている。Cf. also Quine, "On Carnap's view on ontology," *Phil. Studies* 2 (1951), 65–72.

(筆者、京都大学文学部〔哲学科〕大学院学生)